

【体験版】

ユニコーンの化身に

永遠の処女として

身も心も愛され続ける話

2024

ぽび山ランド ぽび山ぽび乃進

それは、夜闇に包まれた森の奥深くでのこと――。

「ああつ、いいつ♡ それ好きいいつ♡ もつと、もつとおおつ♡♡♡」

獣すらも寄り付かない大樹の側で、あられもない嬌声が響き渡っている。

そこでは、一組の男女が半裸で情事に耽っていた。

ただ野外ということもあって、二人はまるで獣のような交尾をしていた。女が四つん這いになり腰を高く突き上げ、その背後から男が肉棒を容赦なく叩き込んでいる……といった形だ。

「んっ、はあつ♡ こんな知らないっ♡ 気持ち良すぎっ♡ ん、ああんっ♡♡」

どうやら女は処女だったらしい。結合部からは愛液の他に真つ赤な鮮血が流れていた。

しかしその顔や腰つきは、初心な乙女のものだとはとてもじゃないが思えない。

口の端から涎をたらし、快楽に表情をとろけさせている。しかも男の抽送に合わせて浅ま

しく腰まで動かしている始末だ。

「あんっ、すきい♡ ユニコーン様、すきっ♡ 馬チンポでずぼずぼしてえっ♡♡」

「……………」

その一方で、男は冷めきつた目をしていて。

ユニコーンと称された通り、その男には水晶のような材質の長い角と白く毛並みのいい尻尾が生えていた。白髪に白い肌、そして体格の良さに見合った男根まで持っている。そこから察するに、真にユニコーンの化身なのだろう。

そんな美しい男が、顔を顰めながらも腰を振っているのだが……。

「っ…………!? けほっ、けほけほ……………」

その最中、男は急に咳き込んでしまう。

顔色は真っ青だし、見れば額には脂汗まで浮かんでいた。

…………どうやら、機嫌が悪いただけではなく体調も悪いようだ。

もう情事を続けることすら辛い状態らしい。男は乱暴に一物を抜き取った後、女を突き飛ばしてしまった。

「きゃあっ!？」

当然、女は受け身を取ることもできずに地面に倒れ込んでしまう。

だがそれでも、脳内がまだ色欲に支配されているらしい。よろよろと体勢を立て直しながら、女は発情しきって潤んだ瞳を男に向けていた。

「ユニコーン様、どうして? いいところだったのに……♡」

男の体調が悪そうなことにすら気付いていないようだ。女は立ち上がると、ふらふらと覚束ない足取りで男へと近づいていく。

「ユニコーン様が誘ってくださったんですよ?♡ もっと私にセックスの快感を教えてください

ね♡♡」

「……………」

一人でベラベラと喋り続ける女を、男は汚物を見るような目で睨んでいた。咳もようやく収まつたらしく、肩で息をしながら口元を拭っている。

「ねえ、ユニコーン様あ……♡♡♡」

そして女が、甘えるように男にしな垂れかかろうとすると――。

「お前、【不味い】よ」

目にも止まらぬ速さで片手を繰り出すと、男は女の首を掴んでいた。

「っ……が、ぐう……!?!」

男の骨ばった長い指が、女の華奢な喉に食い込む。ミシミシと音を立てながら……。

女はもう呼吸すらできないのか、顔をトマトのように真っ赤にしていた。あまりの圧力に眼球さえも飛び出てしまいそうな勢いだ。

——明らかに常人離れた力で蹂躪されている。

「本当、間違いだつたよ。空腹だからって好みを度外視したりしてさ……」

もう女は一言も喋らない。口からは声にならない呻きが出るだけだ。

苦しさを訴えるべく男の腕を掴んではいるが、当然男は意にも介さない。

「やっぱり、ちゃんと美味しそうな子を選ばなきゃ駄目だよね……」

そう、男が諦めたようにつぶやいた瞬間だつた。

ぼきり

女の命が潰える音が、静かな森に響き渡つた——。

## 第一章『運命の人』

「ここは、とても清浄なところなのですわ……」

タンポポの綿毛の如くたゆたう光が一带に満ちているのを眺めながら、私——ニル・デ・トルケマダは一人で街道を歩いていた。

目を凝らしたら確認できるその現象は、間違いなく【神の祝福】だった。

祝福は奥に見える森を中心に、街道や町まで浄化しているようだ。

これだけ祝福が満ちている地なら、異端の存在もそうそういないだろう。大したトラブルもなく町へ到着するはずだ。

「……そうだ、今の内に身だしなみを整えておかなくては」

長旅をしてきたとはいえ、くたびれた格好をしては失礼だろう。

修道服を軽く叩いて埃を落とした後、私は荷物から手鏡を取り出した。それを確認しながら、頭に被っていたヴェールの形を整える。長時間の移動で髪がほつれていたらしく、薄い金色の髪が布の隙間から出てしまっていた。あとは胸元に下がっている十字架の位置も、真っ直ぐになるように調整するのも忘れない。

【いかなる時でも清らかであれ】。これは聖庁の教えの一つでもあった。

「あの……もしや、異端審問官様ですか？」

そんなことをしていると、背後からか細い声が飛んでくる。

振り返ってみればそこには、不安そうな面持ちのおばあさんが立っていた。農作業の帰りなのだろうか、手には鍬を持っている。

「ええ。いかにも私は聖庁より遣わされた異端審問官で、ニルと申します」

手鏡を荷物に仕舞ってから答えてみると、おばあさんはほっとしたように胸を撫でおろした。



「私はすぐその町に住まう者です。もし異端審問官様とお会いできたら、領主の館まで案内しろと申しつけられておりまして……」

「そうだったのですね。では、お手数おかけしますがお願いしてもよろしいでしょうか？」

「ええ、もちろん」

道案内を頼んでみれば、おばあさんはすぐに先導するべく歩き出してくれる。

そんなおばあさんの後ろ姿を、私はまた目を凝らして観察してみた。

やはり……というか、おばあさんには邪な気は一切付着していなかった。ここまで清浄な土地だと、住んでいる者も清らかなようだ。

「となると、今回の依頼はすぐに終わるかもしれませんね……」

「？ 異端審問官様、何かおっしゃいましたか？」

「い、いえ。何も……」

一人きりで長旅をしていたせいで、どうも独り言つ癖がついてしまったようだ。

恥ずかしさから顔を俯かせながら、私は荷物を手におばあさんの後を追って歩き出した。



そして、ようやく辿り着いた領主の館で――。

「異端審問官様！ よくぞ来てくださりました！！！！」

私は盛大に領主様から歓迎されていた。

内密な話をするため客室に通されてはいるものの、この声の大きさでは外まで貫通しているのではないだろうか。心配でキョロキョロしてしまうが、領主様はあまり気にしていないようだ。

「しかし異端審問官様、随分とお若いのですね。私の娘とほとんど変わらないではないですか。お一人でいらつしやると聞いていたので、もつと年かさの方が来るものだとばかり……」

年若い私が来てしまったので、内心不安なのだろう。領主様は明らかに心配そうに眉を落としていた。

……ここは、きちんと説明した方がいいだろう。

「ご安心を。こう見えても私は、異端審問官第十五部隊の副部隊長を勤めております。単独で依頼を任されるのもこれで十七回目です。今回の依頼を達成できる実力は持つっていると聖庁から判断されての派遣となっております」

「な、なんと……!! それは失礼いたしました」

具体的に説明してみれば、領主様はすぐさま頭を下げてくれる。

——聖庁という組織は、一般的な宗教集団とは少し違う。

この世には悪魔や妖異といった、人間の法では裁けぬ存在——【異端者】が多くはびこっている。それを排除するために結成されたのが、聖庁という組織である。

中世から近世にかけて行われていた異端審問から派生して誕生した組織なので、神への信

仰の力を使用するのは変わらない。ただ裁きにかける者が、教義に反する者か異形の者かの違いである。

そしてそれを実行に移すのが、私のような異端審問官と呼ばれる者たちなのだ。

「それで……今回討伐するのは、どのような異端者なのですか？」

「……何らかの獣の化身、だと思えます」

早速依頼の話振ってみれば、領主様は声のトーンを抑えてつぶやく。さすがに事件の話となると、普通のテンションではいられないようだ。

「実はここ数ヶ月、この町では多くの民が行方不明になる事件が起こっておりまして……」

「どのような状況で、何名ほど消えてしまったのですか？」

「合計二十名ほどです。しかし集団で一気に消えたのではなく、気が付いたら一人ずついなくなってる……といった形でして。消える日時もバラバラです。全員、消える直前までごく普通の様子でしたし、争った形跡もありませんでした」

「なるほど……」

そうなる、幻術や精神操作系の術が使え、異端者なのだろうか。幸い、神のご加護に守られている私にはそういった小細工は通用しない。

「ではなぜ、異端者が獣の化身だとわかったのです？」

「実際に遭遇したからです。私を含めた志願者たちで付近の森を搜索してみたところ、その奥地にある湖畔で大量の遺体を発見しました。ほとんどが白骨死体でしたが、中にはまだ腐敗も白骨化もしていないものもあって……。ただ男は原形をとどめなくらい叩き潰されていて、女は犯された上に首をへし折られていました。……全員、行方不明となった者です」

その惨状を思い出してしまったのだろう。領主様は自分で自分の肩を抱きながら、ぶるつと体を震わせる。

「その時視線を感じて振り返ってみたら、異形の者が立っていたのです。頭から長い角を一本生やし、馬のような尻尾を持った妙齢の男が……。あれは明らかに人間ではありませんで

した」

「その後はどうなりましたか？ 異端者は……？」

「わかりません。男が近づいて来ようとしたところで、我々は一目散に逃げてしまいましたから……」

そこまで話したところで、領主様は救いを求めるように身を乗り出してきた。

「異端審問官様、どうかあの異端者を退治してください。一昨日も一人町民が消えてしまいました。このペースで犠牲者が増えていけば、いずれ我が町は滅ぼされてしまいます！ どうか、どうかお助けを……！」

その切実な訴えを聞いて、私は改めて自分の使命を自覚した。

——やはり、異端者は全て排除しなければならない。

世界を正しい方向に導くために。そして……力なき人々を守るためにも。

「お任せください。必ずやこの町に平穏を取り戻してみせます」

私がしかと頷いてみせると、領主様は安堵したように表情を和らげた――。



依頼の詳細を聞いた後、私はすぐさま調査をするべく森へと出発した。

一昨日も犠牲者が出たという話が本当なら、長引かせれば長引かせるほど状況が悪化してしまうだろう。次の犠牲者が出る前に決着を付けたかった。

ただ、異端者が発見された森はかなり広いようだった。日が落ちてすっかり暗くなっているというのに、目印となる湖がまったく見えてこない。できればそこまでは今日中に向かってみたいが……。

「……やはり、綺麗な森ですね」

手にしたランタンで周囲を照らしてみれば、至るところに神の祝福がフワフワと舞ってい

るのが見えた。森の外から確認した時とその印象はほとんど変わらない。

正直言うと、この森に異端者が生息しているとは思えないが……。

そんな清らかな森を歩きながら考えるのは、異端者のことだった。

領主様の話が正しければ、その正体は恐らくユニコーンの化身だろう。

ユニコーンとは一角獣とも呼ばれる白馬だ。その角に癒しの力を持っていて、毒で汚された水を清めることができる。聞く。獰猛で力もとても強いが、普通の人間でも十分退治できるとか……。

それに……処女である娘の前では非常に大人しくなるらしい。

私は聖職者であるが故に処女だ。だから戦いになったとしても苦戦はしないだろう。

「？ あれは……」

するとその時、奥の方にひと際大きい光が見えてきた。

何かと思つて目を凝らしてみれば、それはゆらゆらとした水面が広がる湖だった。暗闇の



中ではあるけど、神の祝福で照らされているおかげで、その全容がはつきりと見える。

——恐らく、この辺りで領主様は異端者を目撃したのだろう。

私は周囲を警戒しながらも、更に湖へ歩み寄ってみることにした。そしてしゃがみ込みながら、その水面にそっと手を浸してみるが……。

「……おかしいですね」

不思議なことに、湖に穢れは一切感じられなかった。

領主様の話によれば、この辺りで人が死んでいたはずである。だとすれば、この湖にも死者の血や後悔の念が浸み込んでいてもおかしくはない。実際今まで経験してきた現場でも、人が亡くなった場所は穢れてしまっていた。

ただこの場には祝福の優しい光と、耳に痛いほどの静寂が広がっているだけだ。

まるで領主様の話なんて、全て嘘だったかのように……。

「そこにいるのは誰？」

——と、そんな時だった。

こちらの思考を遮るように、落ち着いた低い男性の声が飛んでくる。

何かと思つて顔を上げてみれば、湖の淵に一人の男性が立っているではないか。

……ただの男ではない。水晶の如く透き通る長い角と、絹のように白く滑らかな尾を持つ美丈夫だった。

「ユニ、コーン……」

ターゲットの異端者であることは間違いない。

だけど私は、その男性に返答することができなかつた。

……あまりにも美しかつたから。

白馬の異端であるが故だろうか。白い肌に白い髪を持つその人は、夜闇の中でも薄つすらと光り輝いて見えた。体の造形は古代ギリシア彫刻のようでたくましく、顔も端正で……。

周囲を舞う神の祝福や、水で濡れて透けている衣服の存在も相まって、一種の芸術品にし

か見えなかった。

それに、どこかで見ることがあるような……。

しかしそこで、私は慌ててかぶりを振る。

相手は異端者なのだ。常軌を逸した美貌も計算の上に作られている可能性が高い。

清められた十字架を握りしめながら、私はゆっくりと立ち上がった。これさえ持っていれば、詠唱なしで術が発動できる。遅れは取らないはずだ。

「修道女……いや、異端審問官かな？ 君、名前は言える？」

だけどユニコーンは、私のことをまったく警戒していないらしい。心配そうな表情をしながら、こちらへと歩み寄ってくる。

水面が彼の動きに合わせて波紋を作っている様から、その者が間違いなく現実に存在していることを教えてくれた。

「……私はニル。おっしゃる通り、異端審問官です」

「ニル……かわいらしい名前だね。僕はスノウ。この森に住んでいるユニコーンだよ」

そう言つてユニコーン——スノウは、人の好きそうな笑みを浮かべる。

こちらを油断させるつもりだろうか。武器は持っていないようだが、間合いには入らない方がいいだろう。私は不自然にならない程度に、数歩ほど後ずさつた。

「君みたいな弱い女の子が夜の森を歩くななんて危ないよ。お腹の減つた獣に襲われちゃうかも……」

「ご親切にありがとうございます。ただ私は、この森で起きた事件の調査に来たのです」

「事件つて？」

「少し前、この森で大勢の遺体が発見されたそうです。その際に怪しい異端者と遭遇したとお聞きして……。何か、ご存じですか？」

回りくどい話をするより、ここはストレートに質問をぶつけてみた方がいいだろう。

これで暴れたり襲い掛かってくるようなら処すればいい。私には異端の術は効かないから、

物理的な干渉にだけ気を付ければいいだけだ。

だけどスノウは、まったく邪気を感じない表情で考え込んでいた。

「ん〜……もしかしたらそれ、あの悪魔の仕業かもしれない」

「……悪魔、ですか？」

「そう、数ヶ月前ほど前からこの森に住むようになったんだよ。何者なのかは知らないけど、人を殺して魂を食べているみたい。怖いよね……」

そうつぶやきながら、スノウは湖の奥に見える大樹を指差す。

「あいつ、殺した人間はいつもあの辺りに捨てるんだ。そうすると動物が食べて始末してくれるから」

言われてそちらを見てみれば、奥の方に祝福が薄くなっている箇所が確かにあった。そこを調べれば何か情報を得られるかもしれない。

……もちろん、スノウが問題の異端者本人であるという可能性はまだ除外していない。悪

魔というのも、ただのその場しのぎの嘘かもしれないからだ。

「案内してあげる。一緒に行こう？」

そう言っつて、スノウが私の目を覗き込んできた瞬間――。

意識が、プツンと途切れた。



どこか遠くから、ぴちやぴちやと優しい水音が聞こえてくる。

神の祝福に身を包まれているのだろうか。先程から、体全体が妙にぽかぽかとしていて気持ちがいい。

表面的な温かさだけじゃない。じんわりと汗も滲んできて、体の芯から熱くなってくる。

無意識の内に、唇の端から熱い吐息が何度も漏れ出てしまう始末だった。

でもその一方で、体は鉛にでもなったかのように重い。身じろぎくらいはできるけど、手足は自由に動かせなかった。

……これは一体、何なのだろうか。

ずっとこの気持ち良さを享受していた気もするけど、徐々に意識が覚醒してきているのが自分でもわかる。

「ん……」

そんな夢うつつの中、重たい瞼を何とか開いて確認してみると――。

「あ、目が覚めたかな？」

――全裸のスノウが、私に押し掛かっていた。

「えっ……?」

その時私は、視界に入ってきた情報を受け入れることができなかった。

一糸纏わぬ姿になって仰向けに横たわる自分。手足はロープで縛られてベッドに固定されてしまっている。頭のヴェールも取られているのか、視界の端に自分の金髪も見えた。

そんな私の上に、同じく全裸になったスノウが覆いかぶさっていた。下半身は普通にベッドの上にあるけど、それ以外はほとんど私の体の上に乗っかってしまっている。体が上手く動かせなかったのはスノウのせいだろう。

では、あの妙な心地よさの正体は――。

「ニル、びつくりさせてごめんね。もうちょっと味見させてね……」

私が固まっているその隙に、スノウは身を乗り出して私の首元に顔をうずめてくる。

スノウのふわふわとした髪の毛が首筋をくすぐってきて、思わず身をよじってしまった。

「あっ……」

スノウはそのまま、私の首筋にぴちやぴちやと熱い舌を這わせてくる。



最初は筋の窪みを確かめるように舐めとつて。そのままツーツと舌でなぞりながら降りていき、今度は鎖骨周辺を丁寧にくすぐつてくる。スノウの舌が熱いのもあって、自分がアイスキャンデーみたいに舐め溶かされている気分だった。

しかもその間、スノウは大きな手の平で私の腰やお腹、そしておへそを優しく摩つてくる。じつくりと、でも確実に、体の奥に灯つた熱をより強くしようとしてくる愛撫だった。

「っ、う……くう……っ」

一方的に与えられるそんな刺激の数々を、私は受け止めて身悶えするしかなくて……。目にした時は信じられなかったけど……間違いない。

——私は、犯されているのだ。

「や、やめてください。このようなこと……汚らわしい……!」

状況を正しく認識した途端、私は抵抗するべく体をねじっていた。

だけど手足に繋がれたロープは固く、いくら捻ろうと結び目が緩むことはない。その上、

伸し掛かっているスノウの体格が私とあまりにも違いすぎるせいで、びくともしなかった。

「ニル、あんまり動かないで。僕の角が刺さっちゃうから危ないよ」

「な、なら貴方が引いてください……！ 私は神に身も心も捧げているのです。このような低俗な行為、許されるわけが——」

「寝ていた時は、あんなに気持ち良さそうにしてたのに？」

「っ……！！」

その指摘に、カツと頬が熱くなった。

気を失っていた間、ずっとスノウの愛撫を受けていたのだ。意識こそはなかったものの、自分が与えられたものを素直に享受していたのは否定できない。

体の奥の燃えるような感覚だって、まだ完全には消えていない——。

「さっきのニル、かわいかったなあ。僕が優しく触れるだけでビクビクしてて。甘い吐息だつてたくさん聞かせてくれたし……」

「やめ……止めてください！ そのようなこと、知りたくありません！」

「そう？」

するとスノウは、子供みたいなあどけない表情で目を瞬く。

「まあ、ニルが美味しく食べられれば僕は何でもいいけど……」

そしてまた、何事もなかったかのようにスノウは私への愛撫を再開する。

……絶対に。絶対に、反応なんてするものか。

私は声押し殺すために歯を食いしばる。

状況は何一つ好転していないけど、今の会話で二つほどわかったことがある。

まず一つは、スノウが件の異端者であることが確定した。犠牲者の中でも、女は犯された後に殺されていたそうなのだから、この行為自体が自白のようなものだろう。

そしてもう一つ。シーツの上に血の染みはできていなかった。ということは、まだ私は破瓜していないのだ。

ならばまだ、この身から神のご加護は失われていないはず……。

「っ……町の人たちを殺したのは、貴方なんですね……」

「そうだよ？」

何でもない風に答えながら、スノウは次に私の胸へと手を伸ばしてくる。

「っ……」

思わず身を固くしていると、スノウの手によって乳房が大胆に形を崩されていく。胸の奥をほぐしながら絞られて、そして柔らかさを堪能するべく潰されて……。自分の胸がそんな風に歪められた姿を見たのは初めてだった。

その光景を眺めているだけで、自分が本当に淫らな行為をしているのだと自覚できてしま  
う……。

「いあっ……!?!」

その上、人差し指の爪で乳首をカリカリされると、反応しなくなっても体が勝手に跳ねて

しまう。喉の奥がむず痒くなってきた、思わず声も出てしまった。

そんな私の反応を見たスノウは、心底嬉しそうに微笑んだ。

ここが好きなの？　とでも問うように、今度はクリクリと乳首を摘まんでくる。表面を擦るような優しい感触に、意識が高いところへ引つ張られるようだった。

「い、っ……くっ、あ……っ！」

歯を食いしばっているのに、媚びた声が喉の奥から漏れ出てしまう。

……駄目だ。頭の中から卑猥な感覚が抜けてくれない。

そう、会話。会話で気を紛らわせればいい。スノウは自白したのだから、問いたださなければ……。

「っ……でも、さつきは……悪魔がいるって、言って……っ」

「あれはニルを騙すための嘘だよ。少しでも隙がないと僕の術は通用しないから」  
私がなんとか紡いだその質問に、スノウはあっさりと答えた。

そう言われて私は、自分が気絶してしまった瞬間を回想する。

あの時はスノウと至近距離で目が合っただけで落ちてしまった。異端の術は神のご加護のおかげで通用しないはずなのに、何故効いてしまったのだろう。

それにどうしてスノウは、こんな最低なことをしておいて一切穢れていないのか……。

ついには美味しそうに乳首を吸い出したスノウの存在が、私はどうしても信じられなかった。

「っ……う……やっ……あ……」

スノウの口の中は生温かくて、涎でぬるぬるとして……。そんなものにちゅぽちゅぽと下品な音を立てて吸い上げられると、何故かたまらない気持ちになる。

しかもスノウは、同時に舌で丁寧に乳頭までなぞっていた。空いている方の乳房も手で揉まれ続けていて、もう何が何だかわからない。

触られてもいない下腹部も切なくなってきた、自分の体なのにコントロールできなくなっ

ていた。

その妙な感覚から逃げるために、私は無理矢理会話を続けるしかなくて――。

「つ……んあつ……あ、貴方は……、どうして、異端なのに……つ、神聖なの、ですか……」

「え、そうなの？ それは知らなかったな」

ちゅぱつと乳首から口を離して、スノウはつぶやく。

ほんの少し唾えられていただけなのに、私の乳首はぷっくりと膨れていた。唾液で濡れてしまっているせいか、テカテカとしてより卑猥な姿になっている。

スノウはそれを満足げに眺めていた。

……違う。私は感じてなんかいない。これだつて単に、いじられ過ぎて腫れてしまっただけ……。

息が上がってきているのも。汗をびっしりと掻いてしまっているのも。全ては私が必死に抵抗している証なのだ。それ以外の意味なんて存在しない――。

「でも、心当たりはあるよ。僕、異端審問官を食べたことがあるから」

機嫌を良くしたスノウが次に手を伸ばしたのは、固く閉ざされていた私の両足だった。

何をするのかと思つたら、スノウは膝を掴んで強引に開脚させてくる。

「え、やあつ……!?!」

そんなことをされたら当然、秘すべき箇所が——陰部が、露わになつてしまう。

私は焦つてすぐに脚を閉じようとしたけれど、それを抑えるスノウの力が強くてびくともしなかつた。

「あれは一年ほど前……一個前の狩場でのことだったかな。そこで異端審問官に討伐されそうになつたから返り討ちにしたんだよ。あの人、たぶん君よりも強かつたんじゃないかな？僕が殺されかけたくらいだから……」

質問に返答しながらも、スノウの目は私の陰部に釘付けとなつていた。

……そこがどうなつていのかなんて、確認したくない。想像もしたくない。



でも必死に目を逸らしていても、スノウの嬉しそうな表情と該当部分の違和感で察してしまふ。汗とは違ふ、別の何かがお尻の方に幾筋も垂れているのも……。

「僕の力が変質したのはそれからだよ。強い幻術を使えるようになったし、角で浄化や治癒までできるようになった。おかげでただ暮らしているだけで土地が浄化されてさ、他の異端者が全然寄り付かなくて楽だったなあ」

つまりスノウの力は、私より格上の異端審問官から奪つて得たものなのだ。だから神のご加護だけでは防げなかったのだろう。

【ユニコーンだから】 【普通の人にも倒せる異端者だから】

この結末は、そう決めつけて油断した私自身が招いたものだった……。

「はうっ……」

そしてついに、スノウは陰部へと触れてきた。

割れ目の具合を確かめるように、人差し指でゆっくりと往復される。なぞられる。それだ

けでくちゅくちゅと卑猥な水音が響いてしまっていた。

身を清める時くらいしか触れたことのない場所に、男の人が指を浅く差し込んでいる。いじつてきている。その事実だけで恥ずかしくて、頭がおかしくなってしまうそうだった。

「話はもういいよね。そろそろここの準備をしてもいいかな？」

「っ……や、やめてください！ お願いだから、もう……！」

「無理だよ。もうお腹ぺこぺこなんだ」

私の意見をあつさり却下して、スノウは手の平全体で股間を撫でてくる。奥から分泌された液体を絡め取り、小陰唇と陰核を巻き込みながら……。

「あうっ……!？」

たったそれだけで、私の体は大きさに跳ねてしまった。

特に陰核に触れた時の衝撃が凄まじかった。神経が集中しているのか、手の平に押しつぶされるように刺激を与えられると、余韻が頭の奥まで響いてくる。体もびくびくと震え

てしまつて……。

そんな私を見て、スノウはまた楽しそうに微笑んでいた。

「嬉しいな、ニルは穢れを知らないまま育ってきたんだね。こんなに未成熟なおまんこは初めて見たよ。ビラビラもちよびつとしかないし、綺麗なピンク色してるし……若いせいもあるのかな？」

「っ……だ、黙ってください……い……っ……」

「クリトリスも小ぶりでかわいいなあ。オナニーなんて一度もしたことないって感じで……」  
そうつぶやきながら、スノウは指の腹で執拗に陰核を撫でてくる。

最初はふにやりとしていたその箇所が、触れられ続けることで芯を持ち始めているのがわかる。それに比例して痺れるような感覚がどんどん強くなっていることも……。

自分の体に、こんな敏感な器官があるなんて知らなかった。知りたくもなかった。

「い、嫌……嫌……っ」

もう、これ以上変になりたくない。

猫背になりながらも腰を逃がそうとするけど、スノウはそれを許してはくれなかった。太ももを片腕で抱えて、逆に自分の方へと引つ張ってくる。

そのせいで背筋がピンと伸びた途端、鈍くなっていた痺れがまた強く響いてきた。

「僕ね、処女の体液とか分泌物を糧として生きているんだ」

「っ………たい、えき………っ?」

「そう。汗とか血液とか唾液とか………あと、愛液とか」

そうつぶやきながら、こちらに見せつけるようにスノウは手を開いてみせる。

それは今まで、私の陰部を触り続けていた方の手だった。透明でねっとりとした液体が、指と指の間を伝っている。

スノウはその愛液を、躊躇することなく舐めとった。

……それはもう、美味しそうに。

「こうすることで生気を吸収しているんだ。触れるだけでも摂取はできるけど、ちゃんと体内に送り込んで咀嚼した方が効率はいいかな」

そんな話をしている間に、味見を終えたスノウの手が元の位置に戻ってきていた。

また陰核をいじられるのかと思つて体を固くするも、その指は割れ目をそつと開いてきて――。

「あとは……破瓜した時の血が好物でさ」

――ずぶり。

そんな音を立てて、スノウの指が一本だけ膣内に入ってくる。

「はっ……、う、うう……っ」

でもその進みは、実にゆつたりとしたもので……。狭い肉の隙間を掻き分けながら、焦らすように這ってくる。

――自分の体の内側を触られている。そんな未知の感覚に、お腹の奥がぞわぞわしっぱな

しだった。

「でも僕、破瓜させた途端にその子のことを食べられなくなるんだ。味が不味いのもあるけど、僕にとつては毒みたいでさ。だから最後は殺して捨てるしかなくて……。そんなことを繰り返してたら、糧となってくれる乙女に全然出会えなくなっちゃった」

そうこう続けている内に、膺壁が柔らかくなってきたのだろうか。スノウの指が滑らかに動くようになってきた。

じゅぼじゅぼと音を立てながら、指が私の中を出入りする。すると収まりきらなくなつた蜜がこぷりと溢れてきて、お尻や太ももを伝っていく……。

「っ……く、うう……っ」

一方的に与えられる刺激に、私はまともに抵抗すらできなくなっていた。嫌なはずなのに、体は何故かスノウを拒絶してくれない。たつぷりと濡れた陰部は、骨ばった太い指をしゃぶり尽くすように啜っていた。

「……ニル。そんな時に君が来てくれたんだ」

そこでスノウは、私を真正面から見据えてくる。

心の底から私のことを欲している。そんな瞳に一瞬どきりとしてしまった。

「一目見てわかったよ。心も体も清らかな乙女だ……っつて」

そう言うが否や、スノウは私の股間に顔をうずめてきた。

挿入した指はそのままに、柔らかい唇で陰核を咥えこまれる。先程乳首でやられた時と同じように、強く吸われながら温かい舌でコロコロと転がされて……。包皮の内側まで丁寧に舐めとられると、意識が全部そちらに引つ張られてしまいそうだった。

「あつ……い、嫌つ。なに、これ……あつ、あつ」

しかもスノウは、膣内に挿入された指まで激しく動かしてくる。

その箇所は、丁度陰核の裏側にあたるどころだった。表では直接舌で舐めまわされて、厚い肉に阻まれた裏側からは、ざらざらした箇所を執拗に押され続ける。

そんなことを繰り返されたら、感覚が鋭くなりすぎて膣内がひくひくと痙攣し始めてしまった。その動きはまるで、スノウの指を離したくないと体が主張しているかのようで……。

自分の体なのに、まともにコントロールできない。

——怖い。

「も、もう嫌……。お願い、やめてください……。！　こんなの、知らない……。っ」

今まで、どんな異端者と対峙しても恐れを抱いたことなどなかった。

ただどうして自分という存在が少しずつ変質していく様を体感させられると、怖くて怖くて仕方がない。もうこれ以上、淫らになる自分なんて見たくなかった。

「……ニル、そんな泣かないで」

するとスノウは行為を中断して、私の様子を見るために身を起こす。

そう指摘されたことで、私は初めて自分が涙を流していることに気が付いた。子供みたいにしやくり上げながら泣いている様は、無様としか言いようがない。



「でもニルはさ、ずっと嫌だ嫌だって言ってるけど……。結局のところ、気持ち良くなるのが怖いだけだよな？」

「えっ……」

「今までたくさん女の子を犯してきたからわかるんだ。本気で嫌がってる子って、ゴミ屑を見るような目で睨んでくるし、おまんこだっつてここまで濡れないんだよ？ 後で始末するつてバレてる時はもつと大変。手足を縛っていても、手首が縄で擦り切れて血まみれになるくらい暴れられちゃう」

その言葉に釣られて、私は自分の手首を見やる。

縄で擦れて少し赤くはなっているけど、血までは出ていない……。

「でもニルは、僕のことをまったく拒絶してないね。破瓜すれば聖職者として大変なことになる上に、事が終われば始末されるのに、そのことは全然気にしてないみたい」

「ち、違います……そんなことは……」

否定の言葉は、最後まで言えなかった。

だって今、スノウと触れ合っているだけでも嫌悪感なんて一切ない。女性を犯して殺す最低な異端者だってわかっているのに、もう受け入れてしまっている。

コントロールできていないのは体だけではない。……感情もだった。

「じゅ……術を、使っているのではないですか。気絶させることができるのなら、魅了することだって……」

「使うわけがないよ。一度しか味わえない、大事な食事に混ぜ物なんてしたら勿体ない」

「そん、な……」

……最後の望みも、あっさり否定されてしまう。

あまりの絶望に、目の前が真っ暗になった。

スノウは私のことを【心も体も清らかな乙女】と称してくれたが、それも全て虚構だったのだ。

私は、神のご加護を賜るのに相応しい人間ではない――。

「……おかしいな。エツチな子は好みじゃないはずなのに」

シヨックで項垂れていると、スノウが私に覆いかぶさるように体勢を変えてきた。

私の胴体を固定するためか、腰のすぐ横に両手を置いていて……。

「ごめんね。本当ならもつと、じっくりほぐしてあげたかったんだけど……。君があまりにも美味しそうで我慢できなくなっちゃった」

そんな言葉を掛けられると同時に、温かくて硬い【何か】が陰部に触れてきた。

目線だけで確認してみれば、そこには――勃起した男性器が押し当てられていた。

それを見た瞬間、私は恐怖のあまりヒュツと息を飲んでしまう。

……本当は、ずっと見えていた。

物欲しそうに先走りが出ているところも。痛そうなくらいそそり立っているところも。首筋を舐められていた時、硬いものが太ももの内側に当たってドキリとしたのも覚えてい

だけど目の前の現実を受け入れられなくて、見て見ぬふりをしていた。そうすればいつか萎んで消えてくれると思つて……。

スノウは興奮しているのか、割れ目をなぞるように幹の裏筋を押し付けてくる。焦らすように何度も上下させながら……。愛液と一緒に小陰唇と陰核がくちゆくちゆとこねられて、また体が反射的に火照つてきてしまう。

「それじゃあ、いただきます」

そう宣言されるのと同時に、亀頭が花卉を掻き分けてきて――。

「い……嫌です！ 許してください！ そ、それだけは……っ」

「だめ。もう食べちゃうね」

と、一方的に言い捨てられた瞬間。

スノウは一気に腰を押し進めてきた。

「っ！！！！」

肉と内臓が、硬くて太いものに貫かれる感覚がした。

ブツンツと何かが破けるような音がして、お腹の中にじんわりと鈍い痛みと熱が広がる。

強烈な圧迫感にえづきながらも視線を向けてみれば、結合している箇所から真っ赤な血が幾筋か流れ出ているのが見えた。

——破瓜、してしまった。

「っ…………あ、ああ…………」

同時に、体から急激に力が抜け落ちていく。

ショックで脱力しているのもあるけど、神から見放されて加護を失ったのだろう。いつもだったら意識すれば神の祝福が見えるのに、それも一切感じられない。

……私はもう、異端審問官として死を迎えたのだ。

「ん…………美味しい…………」

その一方でスノウは、歓喜に声を震わせていた。

白い尻尾が高く振られているのは、喜びの表れなのだろうか。恍惚とした笑みを浮かべながら、スノウは咀嚼するように結合部を軽く揺さぶってくる。それだけで汗と粘り気のある蜜が、ぬちやぬちやと卑猥な音を鳴らしていた。

「すごく美味しい……。こんな初めてだ……ニル、すごいよ……!」

そこからスノウは、どんどんエスカレートしていった。

最初は遠慮がちにゆっくりと。だけどすぐに私の体を両腕でホールドしながら、腰を前後に大きく打ち付けてくる。ベッドが壊れそうなくらいギシギシとしならせながら……。

スノウも本能のままにやっているのか、加減は一切してくれなかった。額には汗が滲んでいるし、息もどんどん荒くなってきた。

——【私】で、興奮しているのだ。

「あつ、あ、うん……つ、や、あつ、ん、あああつ……!」

体格のいい男性に無茶苦茶にされて、華奢な私の体で受け止めきれぬはずがなかった。

お腹の内側が挟られる度に呻き声が出てしまう。苦しい。息がうまく吸えない。腰が砕けそうになる。こんな行為を好んでやっている人がいるなんて、とてもじゃないけど信じられなかった。

ただどふと顔を上げてみれば、スノウが気持ち良さそうに笑っているのが見えて……。  
目が合ったその瞬間、なぜか胸が締め付けられてしまう。

「安心して……最後まで綺麗に食べるね。こんなに美味しいもの、もう二度と食べられないかもしれないから……」

下半身のピストンはそのままに、スノウは身を乗り出して再び首筋に顔をうずめてきた。

「あ、んっ……」

最初にやってくれたように、舌で愛撫をしているらしい。スノウは首筋の柔らかい皮膚に吸い付きながら、熱い舌で筋のところを丹念に舐めとつてくる。

私の苦しさを緩和させようとしているのだろうか。そうされるだけで、意識が分散して下

腹部の痛みが和らいでくる気がした。むしろくすぐったくて、むずむずして、無性に身悶えしたくなってくる。

またスノウが汗びっしよりなせいか、首元を愛撫されながら抽送されると、接触している箇所がぬるぬると擦れてしまう。他人の汗なんて普段だったら汚らしいと思うはずなのに、今は何故か心地よく感じる。スノウの獣のような汗の香りも好ましかった。

「やっ……あ、んんっ……」

そんなことをしばらく続けていると、不思議なことに下腹部も辛くなってきた。苦しただけだったはずなのに、硬くなった一物で最奥をノックされると頭の奥が痺れてしまう。粘膜を抉られるように擦られる感覚もクセになってきていた。

それに連動して、唇の端から甘えたような声が漏れ出るのが恥ずかしい。

「良かった。ニルも気持ちいい？」

「ち、違……」



「ふふ、そんなとろけるような顔して否定するんだ。どうせ死んじゃうんだから、素直になつた方がいいのに……」

そしてスノウは身を起こすと、次に乳房に手を伸ばしてくる。

「ひあっ……!？」

これも最初によつた動きの復習のようだった。胸全体を歪ませるように揉みながら、スノウは腰を遠慮なしに打ち付けてくる。乳首を巻き込みながらこねられると、また意識が高いつころへ引つ張られる感じがした。

「あつ、やつ……あ、あつ……んあつ」

神経が鋭くなつているところに新たな刺激を与えられて、興奮しているのだろうか。私も息をする間隔が短くなつて、媚びたいわけじゃないのに自然と声が出てしまう。

……もしかして、これが【気持ちいい】という感覚なのだろうか。

体が熱くて。背筋がぞわぞわして。後頭部が引つ張られるような感じで。くすぐつたくて。

お腹の奥がきゅんとなる。

だとしたら私は、最初から性行為の快感を得ていたことになる。

スノウを拒絶しない時点でわかつてはいたけど、私は心底ユニコーンに殺されるのに相應しい女だったのだ。

「はっ、やあっ……ん、んあっ、ああっあっ……♡」

そうだと自覚した途端、我慢していた声が自然と大きくなっていた。

ずっと食いしばっていた歯を緩めたら、文字通りもう歯止めがきかない。スノウが与えてくれる快感全てを受け止めて、素直に体を震わせながら喘ぐだけだ。

……なのに、目からは涙が溢れて止まらなかった。

「ねえニル、気持ちいい？」

「気持ちい……っ♡ 気持ち、いいです……っ♡」

ようやく吐き出された私の本心に、スノウは満足げに微笑んでいた。

「いい子だね。ご褒美にもつと気持ち良くしてあげる」

その言葉と共に、スノウの顔がまたこちらへと近づいてくる。

それは、ため息が出てしまいそうなくらい綺麗な顔だった。

そういえばこの顔、どこで見たのかと思ったら……。聖庁に引き取られる前、大好きですつと読んでいた恋物語に登場した王子様に似ているのだ。スノウを最初から受け入れていたのは、そのせいなのだろうか。

下腹部を出入りする肉の杭に意識を集中しながら、そんなことをぼんやり考えていると――

「んっ……」

――口付けを、された。

私が驚いて固まっている間に、スノウは唇をふにふにと甘噛みしてくる。

かと思つたら、温かい舌がぬるりと唇の隙間から侵入してきて……。

「ちゅっ……んむっ、あっ……♡　ちゅぶっ、ちゅっ……あ、んんっ♡」

受け身になっている私の舌を、スノウが絡め取ってくる。

性行為も口付けも、本来なら愛し合う者同士がやるものだ。しかもスノウはただ私を捕食するために抱いている。

それなのに私は、この行為にどうしようもないほどの快感を覚えてしまっていた。

上からも下からもぐちよぐちよに犯されるのが気持ちいい。もう淫乱なのは疑いのような事実なのだから、原形もなくなるくらい性行為の熱で溶かしてほしい。

——殺してほしい。

「っ……変だな。いつもだったら、そろそろなんだけど……」

だけどその途中で、スノウは唇を離してしまう。

酸欠でぼんやりとする視界で確認してみれば、彼は不思議そうに小首を傾げていて……。

「ニル、どうして？　処女を奪ってから結構経っているのに、美味しいままでいてくれる子

なんて初めてだよ。前に食べた異端審問官だってこんなことはなかったのに……」

「ふあっ♡ はっ、ふ……っ♡ あ、やつ♡ んああっ♡」

重要なことを聞かれているみたいだけど、こんな激しい行為の最中では返答なんてできなかった。

スノウも私を貪るのに夢中なのか、ピストンだけは絶対に止めてくれない。

「あ、あっんあっ♡ はあっ、あ、あああ、あ……っ♡」

気持ちいい。喘ぎ声が出てしまう。体が熱い。気持ちいい。呼吸が上手くできなくなる。

何かが自分の中で高まってきているのか、もう気持ち良くなることしか考えられなくなっている——。

「……もしかして、運命の人なの？」

そう問いかけられた瞬間、ずんっとお腹の奥に重い一撃が差し込まれた。

「っ、ああああんっ！♡♡♡」

その時、経験したことのない感覚が私の身に押し寄せてきていた。

頭の中が真っ白になって、お腹の中にあるスノウ自身の形がわかるくらい膣壁が引き絞られてしまう。なのに全身が弛緩して力が一切入らない。頭の奥でパチパチと光が弾けている。

しかも全ての感覚が敏感になっているのか、スノウの肉棒が侵入してくる度に意識が飛んでしまいそうになっていた。

あまりにも強烈な刺激に、結合部からぴゅつと水っぽい液体まで出てしまう。

「っ……イっちゃったんだね。中、すごいねっつる……っ」

スノウにそう指摘されたことで、自分の身に何が起こっているのかようやく理解できた。

私は今、性行為を最後の最後まで味わい尽くしてしまったのだ。快樂に負けて、異端者に身を委ねて墮落して……。

後悔がないと言えは嘘になる。だけど、こんな至福感を抱いたまま死ぬのなら、ある意味本望なのかもしれない。

絶頂を迎えて敏感になった体でスノウの力強いピストンを受け止めている中、そんなことを考えていたのだけど――。

「っ……っ！」

急にスノウは動きを止めて、男性器をより深く挿入するべく私の腰を抱き直してくる。

同時に膣内には、破瓜の時とは違った温かさがゆっくりと広がっていた。

「は、何これ……たまらない……っ」

目の前でスノウが、息を荒くしながら気持ち良さそうに目を細めている。

……一体、どうしたというのだろう。

ビクビクと震えながらされるがままになっていると、スノウは瞼を伏せながらそつと私の頬にキスをしてくる。

一度だけではない。何度も何度も、まるで愛を囁くように……。

単純な私は、それだけでまた胸をときめかせてしまった。胸と下腹部がきゅんきゅんする

のを止められない。スノウが本当の王子様に見えてきてしまう。

「……決めたよ、ニル。僕はこれから君だけを食べて生きていく。ずっとずっと大切にしながらあげるから……」

スノウがうつつとりとそう囁いた時、男性器がずるりと結合部から抜け落ちる。

すると収まりきらなくなつた精液が、膣内からこぷりと溢れ出てきていた……。

【体験版ここまで】



【体験版】ユニコーンの化身に永遠の処女として身も心も愛され続ける話

---

発行日：2024

発行者：ほび山ランド/ほび山ほび乃進

---